

ブータン極東部高地のメラックにおける牧畜の変化と その歴史的社会的背景

稲村哲也¹⁾、タシ・ドルジ²⁾、川本 芳³⁾

1) 愛知県立大学外国語学部

2) ブータン農業省畜産局

3) 京都大学霊長類研究所

メラックの牧民は、本来はヤクとその交雑種ゾムの移牧に専門的に従事していたが、約60年前に、ジャツァム（在来ウシ♀とミタン♂の交雑家畜）やミタンを、下流の農村から導入した。そして、近年、より多くのジャツァム、ジャツァム・ゾム（ジャツァムとヤク♂の交雑種）、ヤンクム・ゾムなど（ヤクと在来ウシとミタンの「三元交雑」を含む）多様な交雑種を飼うようになった。そうした変化の要因の一つは、1962年に起こった中国インドの国境紛争の結果、チベット由来の種ウシが供給されなくなったこと、そして人口増加により、低地で放牧できる家畜の需要が高まったことが挙げられる。他に、経済的理由がある。つまり、ジャツァムは手に入れやすく、ジャツァム・ゾムは多くのミルクを生産する。またジャツァム・ゾムとミタンの交雑により、ゾムの再生産が可能となった。それらは、市場経済化によってより多くの現金が必要となった牧民のニーズに適合した。飼養家畜、とくに新しいタイプの交雑の多様化は、歴史的社会的背景に対する、メラックの牧民のユニークな適応戦略と言える。

はじめに

筆者らは、ブータン極東部に位置するメラック（Merak）とその関連地域で、2010年3月、2011年3月、2011年9月の3回にわたってフィールドワークを重ねてきた（図1）。いずれも現地滞在が数日という短期の調査日程であったが、メラック本村（標高約3,500メートル）と夏の放牧地であるメラック村の上部（標高4000メートル余）、春秋の放牧地であるチプリン（Cheabling、標高2800メートル前後）、冬の放牧地であるカリン（Khaling、標高約2,000メートル）周辺で観察と聞き取り調査^{注1)}をすることができた。そこで、本稿では現地調査のデータに基づき、メラックの人びとの生活を、牧畜の形態とその変化に焦点を当てて論じたい。

メラックとそこから北の峠を挟んで隣接するサクテン（Sakten）の人びとは、農耕には全く従事せず、以前からヤク及びそのウシとの交雑種ゾムを飼養して生活してきた。その二つの村は併せて「メラック・サクテン」と呼ばれ、その地域の住民は、ひとつのまとまりをもったエスニック集団

として捉えられている。

メラック・サクテン地域は、インドのアルナーチャル・プラデーシュ州と国境を接している。メラック・サクテンの住民は、プロパ（Brokpa）と呼ばれる^{注2)}。プロパは牧民を意味すると同時に、エスニック・グループの名称ともなっている。彼らは昔、東チベットから（タワン地域を通して）この地にやってきたという伝承が伝わっており、アルナーチャルのタワン地域との関係が示唆されている。アルナーチャルの現在のタワン郡や西カメン郡にモンパ（Mongpa）と呼ばれる民族が住んでいる。彼らの多くは農民であるが、モンパの中には高地に住む牧民もあり、彼らもプロパと呼ばれている。メラック・サクテンの牧民は、家畜の季節移動の範囲をアルナーチャルのモンパの居住する地域にまで広げており、古くから交易・通婚等の関係を維持してきた。プロパの服装もブータンの民族衣装とは異なり、モンパの衣裳と類似している^{注3)}。言語はプロパ語（Brokpaka）である。メラックの南西の下流域の稲作農村地域では、ツァンラ語（Tsanglaka）が話される。プロパの人々



図1 調査地周辺地図

(メラック・サクテンの住民)はその農村地域と密接な交易関係を保っており、その必要性からある程度ツァンラ語を理解する。

メラックの牧民は、本来はヤクとゾム（ヤク♀とウシ♂の交雑種）の移牧を専門的に行っていたが、数10年前に下流域の稲作地域からジャツァム（在来ウシ♀とミタン♂の交雑家畜）を導入した。また、アルナーチャル由来の熱帯のウシ科家畜ミタン♂少数を、種オスとして、下流域の農村から導入した。その後、ヤクと在来ウシとミタンの「三元交雑」を含む多様な交雑の試行錯誤を続けてきた。その結果、現在、彼らが飼養する家畜は、他のヒマラヤ・チベット世界に例を見ない複雑な交雑状況を呈している。言い方を変えれば、ブータンの牧畜の特徴として、ヤク・ゾムの移牧（高地と中間地域の間）とジャツァムの移牧（中間地域と低地の間）という2つの移牧システムの併存が挙げられるが、メラックではその2つのシステムが交錯した状況を呈しているのである。本稿では、特に、そうした変化の状況を明らかにすると共に、その要因と歴史的・社会的背景を考察したい。

本稿では、多数の家畜の名称が登場する。ヤクは本来オスの名称、またゾム（ヤクとウシの交雑種）はメスの名称であるが、慣例とブータンの畜

産局事務所の統計にならい、本稿ではヤク、ゾムを、オス・メスの総称として用いる。必要に応じて♂♀の記号を付す。また、本来のゾムとは異なる多種のヤク交雑種（三元交配を含む）を「ゾム」と記す。

調査地の概要

上述のように、メラックは、ブータンの極東部にあるタシガン県の東部に位置し、インドのアルナーチャルに接している。メラック (Merak) の Me は火、rak は大地を意味し、「メラック」は森を開いて焼いた場所という意味である。村は標高約 3500 m の高さにあり、メラックの名の通り周囲は森に囲まれ、農地は全くない (写真 1、2)。

2010年3月時点の聞き取りによる統計データによれば、メラック行政村 (Geog) の全戸数は342戸、人口は2126人である。村役場 (Block office) は、村長 (Gup)、副村長 (Mangmi)、地区長 (Tsokpa) 3人、助手 (Chipon) 7人、秘書 (Geydrung) 1名である。政府の機関として、農業省事務所^{注4)}があり、森林担当者 (Forester)、畜産担当者 (Livestock) 各1名が勤務している^{注5)}。この事務所は約30年前に設置された。また、国立公園事務所 (Park Office) が約10年前に設置され、係官が数名駐在している。メラック村には6年生までの小学校があり、生徒数は約190人、教師は校長を含め8人である。学校は25年前に設立された。小さな診療所が16年前に設置され、医師は常駐していないが、看護師が2人勤務している。村の上水道は7年ほど前に敷設された。観光協会 (Tourist Council) が5年前にゲストハウスを設置した。また、県行政府がツーリスト用キャンプ場を1年前に設置した。なお、村には仏教寺院があり、2人の僧がいる。

現在まで自動車道路は通じておらず、2010年3月の調査では、フォンメ (Phongme, 標高2000メートル弱) を徒歩で出発し、途中チブリン (Cheabling, 標高約2800メートル、春秋の放牧地) で一泊し、翌日の夕方にメラック (標高約3500メートル) 到着するという行程であった。2011年には自動車道路がメラック方面に若干延び、2011年3月には、ラディ (Radhi) 村のカルマ・ゴンパ (Karma Gompa) の下から出発し、チブリンまでは半日 (午後から吹雪となった)、そこからメラックまで1

日の行程となった。2011年9月には、強行軍であったが、早朝にカルマ・ゴンパを出て夜にメラックに到着した。

ブータンでは、2008年の民主化以後、開発が急ピッチで進められている。その最も重要なものが、2012年までにはほとんどの行政村までの道路と電気を繋げるという計画である。メラックの場合、電気敷設工事が2011年8月に完成したため、2011年9月の調査時には、宿舎（ゲストハウス）でも電気をつけることができた。送電線敷設の器材運搬のため、メラックへの徒歩路が住民の手で拡張された^{注6)}。2011年3月の調査時には、その道を重い機材を運搬する住民が頻繁に見られた。自動車道路については、村まで開通させるのではなく、近く（徒歩3時間程度）までの建設が予定されている。その理由として、外国人観光客のトレッキングのためのヤクやウマ・ラバによる物資輸送の需要を維持するためと言われている。

由来伝承

メラックの人びとは東チベットから移住してきたと言われているが、下記のような伝承が伝えられている。

6-7世紀のこと、有名なチベットのソンツェンガンボ王の治世。南東チベットの小国にツォナ(Tsona)という王がいた。王の宮殿は山の陰にあり、陽が当たらなかった。そのため、王は民に山を切るように命じた。民はその命令を実行するために苦労していた。

ある日、美しい娘が、人びとに彼女の考えを話した。「山を切る代わりに、王の首を切るほうがいい。」と。それに人びとは同意して、秘密裏に計画を進め、ある祭りの日に実行することにした。人びとは強い酒を醸し、王と兵士たちにその酒を飲ませた。仮面舞踊のとき、踊り手が王に矢を射た。計画は成功して、人びとは自由になった。

しかし、その王の殺害がラサに伝わった。ラサのソンツェンガンボ王は村人を殺すように命じて大軍を送った。そこで、人びとは美しい娘と相談した。娘は、人びとに荷物をまとめて移動するように話した。

人びとは、ヤク、ヒツジに荷物を積んで、南に移動することにした。途中に大きな湖があった。

船を作って人びとは湖を渡った。ヤクは泳いで渡った。白いヤクは渡れなかった。そのため、メラック・サクテンには白いヤクが居ない。一部の人びとはそこにとどまって、タウン地方で住んだ。他の人びとはさらに進んだ。

次にナヤチュンラ(Nayachungla)という高い峠があった。そこを越えられない人はサクテンにとどまった。現在サクテンに住んでいる人びとはその子孫である。力の強い者は峠を越えた。その人びとの子孫がメラックの住民である。

美しい娘はアマ・ジョモ(Ama Jomo)と呼ばれ、神として崇められるようになった。今も山の上に「ジョモの宮殿」があり、ジョモの祭りが行われる。ジョモの歌がその祭りのときだけ歌われる^{注7)}。

生業

ヤク・ゾムの移牧

メラックの村は標高3500メートルに位置し農耕が可能な高さにあるが、メラックにおいては、農耕は全く行われていない。おそらく、元チベットで専門的に牧畜を営んでいた人びとであったこと、この地の谷がせまく険しいため、農地に適する場所がほとんどないことがその理由であろう。

メラックの住民は純粋な牧民であり、従来ヤク(写真3、4)とゾム(写真5)、それにヒツジを飼育してきた。また、荷物運搬のためのウマやラバを飼育してきた。

ゾムは、ヤク♀とゴレン♂(Goleng, チベット由来の小型高地種ウシ)(写真6)の交雑種(F1)で、メスは乳量が多い。ゾム♀に、種ウシ(普通はゴレン)を交雑させて妊娠・出産させるが、生まれたF2は乳量などの性能が劣るため、出生の数日後に額を一撃して殺す^{注8)}。その新生獣の毛皮はチョッキに仕立てたり、熟成チーズを作るための皮袋に加工する。稀にゾムの仔(F2)を育てることもあるが、その仔はコイ(Koi)と呼ばれる。なお、ゾーと呼ばれる交雑種(F1)のオスの方は不妊である^{注9)}。

メラックでは、ヒマラヤの高度差を利用したヤクとゾムの移牧が行われてきた。ただし、移動のルートは多様である。メラック村は、ヒマラヤ主脈ではなく、南西に張り出した支脈の南面の谷間に位置している。高地部が比較的狭いため、その谷沿いの上下移動だけでは十分な放牧地の確保できないのであろう。また、ヤク群とゾム群とは、



写真1 メラック村全景



写真2 メラック村（標高約 3500 m）



写真3 ヤク♀（夏放牧地）



写真4 ヤク群の移動（夏放牧地へ）



写真5 ゾム（搾乳）



写真6 ゴレン（チベット由来の種ウシ）

ゾムの方がヤクよりも低い標高に適しているため、移動ルートが異なる。

重要な移動ルートのひとつとしては、メラック村の周辺や北東に連なる4,000メートルを超える高地を夏の放牧地(写真7、8)として利用し、秋から春にかけて中高度(標高2,800メートル前後)に位置するチブリン(写真9)の草地を利用するというヤクの移動である。夏の放牧地でゾムは7-8月の2か月のみ放牧するが、ヤクはもっと長く放牧する。ゾムの場合は、チブリンなどを春秋に利用し、冬には南西のカリン(標高約2,000メートル)(写真10)方面、南東のケレフ(Khelephu)方面など、数日歩いた低地に放牧地を確保する^{注10)}。

ヤクの場合、夏の放牧地を数か所ローテーションするケースもある。ヤクの場合は高地だけで一年中放牧するケースもある。ヤクの冬の放牧地として以前はチブリンを利用していたが、現在はそこが過密になったため、冬の放牧地を他に変えたケースもある。また、夏、冬の放牧地ともに、ケレフなどの国境に近い地域や、アルナーチャル領域内のタウン郡、西カメン郡まで移動するケースもある。

搾乳

2011年9月24日、メラック村の近くの草地で、TY氏による母ヤクの搾乳を観察することができた(写真11)。まだ暗い早朝4時30分に、ヤクの囲いに案内してもらった。木の杭で作られた囲いに、仔ヤクが11頭集められていた。夜の間、仔ヤクたちは母ヤクの乳を飲まないように、囲いに入れられ、杭に繋がれていた。以下は搾乳のプロセスである。

4時45分、母ヤクが集められてくる。囲いの仔ヤクたちは、母ヤクが近づくと、声を出して呼ぶ。4時50分、母ヤクを柵の近くに集め、搾乳する母ヤクの仔を選び、柵の中から放す。仔ヤクは母ヤクの下に駆け寄り、乳を飲む。2分ほど飲むと、仔ヤクを母ヤクから引き離し、柵の外側に繋ぐ。その時に、塩(オオムギ粉を混ぜてある)を食べさせる(写真12)。次いで、母ヤクの前脚を紐で縛って、ヤクの左脇に座って搾乳をする。約4分間で搾乳が終わると、仔ヤクを杭から放す。仔ヤクは母ヤクに向かって突進し、残った乳を飲む。

搾乳が終了したのは6時前で、すっかり明るくなっていた。搾乳に要した時間は正味で約1時間であった。1頭当たりの搾乳所要時間は6分弱である。結局、11頭を搾乳して、約6.5リットルのミルクが集まった。つまり、1頭当たりの搾乳量は約0.6リットルである^{注11)}。

2011年9月25日に、チブリン(ゾムの秋の放牧地)で「ゾム」の搾乳を見ることができた。この「ゾム」は、いわゆるヤクのF1に限らない多様な交雑種を含んでいる(後述)。ゾムの搾乳で、ヤクの搾乳と異なる点は、搾乳の前に仔家畜に乳を飲ませる、いわゆる「催乳」が無いことである。ゾムが出産した仔は基本的(伝統的)には、生後4-5日後に額を一撃して殺すのが慣習である^{注12)}ため、ゾムの搾乳には仔が関与しないのである。

搾乳の仕方自体は、ヤクとほぼ同じである。チブリンでは、搾乳する「ゾム」に、チーズ加工の残液を与えていた。いくつかの群の搾乳を見たが、そのうちの一つのケースでは、10頭から約10リットルの乳を搾った。1頭当たりの乳量は約1リットルである。「ゾム」の場合は、朝夕に搾乳するのが普通である。したがって、単純計算すれば、1日でゾム1頭につき、約2リットルの乳を搾っていることになる。9月はヤクの乳量が少なくなる時期であるが、この時期には、ゾムの搾乳量はヤクの3倍強という計算になる。

ヤクは朝だけ搾乳する。ヤクの場合には仔家畜への授乳が必要なためである。昼間は仔ヤクも放牧させ、夜の間は仔ヤクを柵に入れるなどして母子を隔離し、朝に搾乳する。

ヤクの搾乳は誰でもできるが、ゾムの搾乳は決まった人でないとできない。ゾムは仔を殺してしまうため、朝晩の2回搾乳するが、仔による催乳がないため、搾乳が難しく、慣れてない人の搾乳を拒むという。

乳製品加工

メラックでのTY氏によるヤクの搾乳の後、自宅でバター加工を観察させてもらった。メラックでは農業省の援助によるクリーム分離器が普及している。以下は加工プロセスである。

6時10分から、搾乳したミルクを7-8分温める。それを濾してから、分離器に注ぐ(写真13)。分離器のハンドルを回すと、上の注ぎ口からクリー

ム、下の注ぎ口から残りのスキムミルクが出る。6時30分、分離が終了し、クリームが800g取れた。この後、容器に入れたクリームをヘラで捏ねると数分でバターができあがった。

チブリンの牧民の家で、熟成チーズ（匂いの強いメラック特産のチーズ）の加工を観察させてもらった。9月26日朝6時45分に訪問すると、すでに、昨晚搾ったミルクから分離器で分離したクリームとスキムミルクがあった。以下はチーズ加工のプロセスである。

クリーム分離後のスキムミルクを大きな鍋に入れて加熱すると固まってくる。加熱しながらゆっくりかき混ぜる。手触りがつるつるしてくるまで加熱する。6時55分、ザルを鍋の中に入れ、ザルの外側から中に入ってくるホエイ（乳清）を柄杓で掬い取る（写真14）。そのホエイを上から溢したり、固まった部分にかけたりする。しばらくして、ザルの中のホエイを柄杓ですくい出し、別の容器に入れる。鍋の中のホエイが減り、次第に水分が少なくなる。水分がぬけて柔らかい固まりになったもの（生チーズ）を、ゾムの仔の毛皮で作った袋に詰めて、針と糸で縫い合わせて密封する（写真15）。これを半年ほど寝かせると熟成チーズができる。

結局、約10リットルのミルクからチーズ3kgができた。同じミルクから分離したクリームを加工して、バター1.25kgがとれた。



写真8 夏放牧地の小屋内部



写真9 春秋放牧地チブリン（標高約2800m）



写真7 メラックの夏放牧地（標高約4000m）



写真10 冬放牧地カリン（標高約2000m）



写真11 ヤク♀の搾乳 (メラック村近郊)



写真12 搾乳後、仔ヤクに塩を与える



写真13 クリーム分離器



写真14 チーズ加工過程 (乳清を取る)



写真15 チーズを熟成させるためゾムの仔の毛皮製袋に詰めて密封する

交易

メラックの住民は農業に従事しないため、乳製品によって農産物を確保することが重要な活動である。農産物を得るには、乳製品を売って得た現金で買う方法と、乳製品と物々交換とがある。

フォンメ、ラディ、ビドゥン（Bidung）など下流の稲作農村では、一般に物々交換が行われてきた。メラックの牧民は、下流の稲作農村に住む特定の農民と交易パートナーとしてのネプ（Nepu）関係を結んでいる^{注13}。交易パートナーと、例えば、チーズ1kgを15ディレイ^{注14}のコメ、トゥモロコシと物々交換する。トゥガラシは適量のチーズ、バターを贈り、その返礼としてもらうことが多い。

現金で売るときはバター1kg当たり150Nu（ヌートラム）、チーズが250Nuである。アルナーチャル西カメン郡のボムディラ（Bomdila）まで売りに行くこともあり、そこではより高い値段、バターが1kg当たり250Nu、チーズが300Nuで売れるという。

昨年まで約40頭の「ゾム」を飼っていたTYさんの一家（事例7、一妻多夫）の場合^{注15}、年間にそれぞれ約500-600kgのバターとチーズを売った。現金に換算すると、少なく見積もって、約20万Nuとなる。「食べるのには十分な収入」になったという。

メラックの牧民は、乳加工品の他に、オスの家畜を売ることもある。インド軍が消費する肉用の家畜の重要があり、アルナーチャルのタウンから買いつけに来る^{注16}。例えば、ヤクの若いオスは約10,000Nu（ほぼヒツジの価格と同じ）、大きなオスは18,000～19,000Nuの値段がつく。

家族、婚姻、相続

メラック住民の家族形態は基本的には息子が家を継ぐ一種の直系家族といえる。ただし、一妻多夫婚（一人の女性と複数の兄弟が結婚する）の慣習もあり、その場合は変則的な直系家族となる。

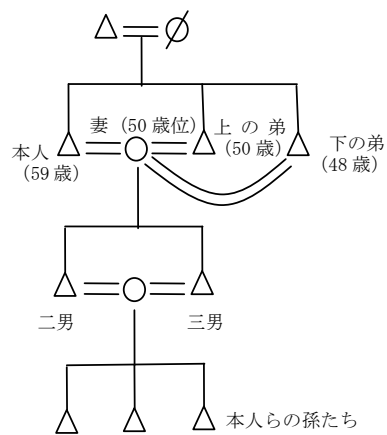
図はLT氏（59歳：事例1）の家族の系譜図である。兄弟3人で一人の妻を共有しているケースである。計7人の子（息子4人、娘3人）がおり、その内の二男と三男が一人の妻を迎えて同居している^{注17}。二・三男も一妻多夫であり、3人の子どもがいる（性別は聞いていない）。父（86歳）を含め、以上が家族の成員である（図2）。

家畜はヤクを50頭（♂10頭、♀40頭）、ゾムを32頭（♂14頭、♀18頭）、在来ウシ（Thrabam）を10頭、種ウシとしてゴレン（チベット由来の高地種ウシ）を1頭、ウマを6頭所有している。本人（エゴ：LT氏）を含めた3兄弟は、次のように、仕事を分担してきた。①本人（59歳：2010年3月現在）：家の管理、ビジネス（畜産物の販売・交換・農産物確保など）、②上の弟（50歳）：ゾムの移牧、③下の弟（48歳）：ヤクの移牧。

妻が夫たちの間を行き来している。現在は、息子たちがゾムの移牧に従事しており、調査時にはアルナーチャルとの国境に近い、ケレフに滞在 중이다とのことであった。

別のインフォーマントのD氏（39歳）のケースでは、18歳のとき16歳の妻と結婚し、2年後に弟が加わって、妻を共有するようになった。本人（兄）は家に居て、家の仕事と畜産物の交換・販売による農産物・食糧などの確保・購入などを担当し、弟は家畜の放牧を担当した。D氏は、その後妻と別れ、別の女性と結婚した。離婚のときに、共有していた家畜はすべて弟夫婦に残した。

D氏によれば、20年前までは一妻多夫はふつうだったし、一夫多妻もあったが、今は単婚が多くなった。以前は、まず妻と話し、次に弟が同意すれば、一妻多夫婚が成立した。最近では、妻が同意しないことが多くなったし、弟も同意しなく



△：男、○：女、＝：結婚、□：兄弟関係

図2 一妻多夫家族：LT氏（事例1）

なった。以前は兄弟同士の仲も良かったが、今は兄弟喧嘩が多くなったという。また、昔のシステムは仕事が分担できて良かったという。

婚姻については、父方は4世代たどって出自が同じ場合は結婚を避けるが、母方は構わない。したがって、メラックの親族システムは父系出自であると考えられる。家を継ぐのは息子のうちの誰でもよく、長子ないし末子を優先する慣習は無いようである。ただし、最近には娘に家を継がせるケースもあるし、その方がいいという回答もあった^{注18)}。

相続についての慣習は、人によって回答が異なり、はっきりしないが、家を継ぐ子に多くを相続し、他の息子たちにも家畜を相続するが、婚出する娘たちには相続しないのが伝統的な慣習のようである。ただし、配偶者が貧しい場合には家畜を与えるとの回答や、娘たちにも平等に家畜を与えたというケースもある。

新家畜導入による家畜構成と交雑の複雑化 新たな交雑の試行錯誤

メラックの牧民は、ヤク (Yak) とゾム (Zom) を飼育してきた。ところが、近年、ジャツァム (Jatsam, 在来ウシ♀とミタン Mithun ♂の交雑 F1) (写真16) が導入され、それとヤク♂との交雑種などの「三元交雑」を含む、多様な交雑種が増えてきた。メラック牧民はそれらを「ゾム」と総称している。現在では、本来のゾムはむしろ少なく、新しい多種類の「ゾム」の方が多く飼われているのである。

2011年9月、実際に、春秋の放牧地チプリンで非常に多種類の「ゾム」を見ることができた。ここではその交雑状況について検討するが、その前に、ブータンにおける2つの基本的な交雑システムを押さえておきたい。一つは、すでに述べたように、ヤク♀とゴレン (Goleng, ♂) による交雑 (F1) で、これが本来のゾムである。このゾム (♀) にゴレンを交雑して産まれる F2 はコイ (Koi) と呼ばれるが、弱く、乳量など家畜としての性能も悪いため、普通は生後4、5日で殺される。一方、すでに述べたように、在来ウシ♀とミタン♂ (写真17) の交雑種がジャツァム (F1) であり、それに在来ウシ♂を交雑させて産まれるヤンクム (Yankum, F2) は、ジャツァムよりは性能が劣るものの、十分有用な家畜として飼われる。さらに

バック・クロスが繰り返され (図3)、F5になると、在来ウシと同じとみなされる。アルナーチャルからのミタンの供給に限られるため、このバック・クロスはブータンで広く見られるものである。

すでに述べてきたように、メラックにおける多種の交雑種は「ゾム」と総称される。それらを区別する場合、ジャツァム (♀) とヤク♂の交雑種は「ジャツァム・ゾム」と呼ぶ (図4) (写真18)。

さらに、現在はミタン♂を飼育する牧民もいて、ジャツァム・ゾム (♀) とミタンを交雑させることも行われている。それはミタンによる一種の戻し交配であるが、牧民はその仔を「ジャツァム (♀)」「ジャツァ (♂)」と呼んでいる (同じく図4)。その交雑種には、半分のミタン遺伝子、4分の1のヤク遺伝子、4分の1の在来ウシ遺伝子が入っていることになる。表1に、ジャツァムをめぐる交雑における遺伝的な交雑割合を示す。

また、ヤンクム (ミタン F2) とヤク♂の交雑種は、特に区別する場合、「ヤンクム・ゾム」と呼ぶ (図5)。同様に、ヤンクム・ゾムにミタンを戻し交配させて生まれた仔は、「ヤンクム (♀)」「ヤンク (♂)」と呼ばれる (同じく図5)。表2に、ジャツァムをめぐる交雑における遺伝的な交雑割合を示す。

さらに複雑な現象として、ジャツァム (♀) に在来ウシを交配させる代わりに、ゴレンを交配させることも行われている。その仔はバッコイ (Bakoy) と呼ばれる (写真20)。ゴレンはチベット由来の高地種のウシであるため、その仔も高地に比較的適応するというメリットがある。このバッコイとヤクを交配させて生まれる仔を、区別する場合には、「バッコイ・ゾム」と呼ぶ (図6) (写真21)。また、バッコイはミタンの F2 という意味ではヤンクムと等価である。牧民は、ヤンクムにミタンを交配させて産まれる仔を「ジャツァム」「ジャツァ」と呼ぶが、それと同様に、バッコイにミタンを交雑させて生まれる仔を「ジャツァム」「ジャツァ」と呼ぶ (図6)。

複雑な家畜構成

以上に述べたような交雑は、牧民が認識しているものだが、実際、チプリンで見た放牧状況は、1,000頭単位の多種多数の家畜が過密状態で入り

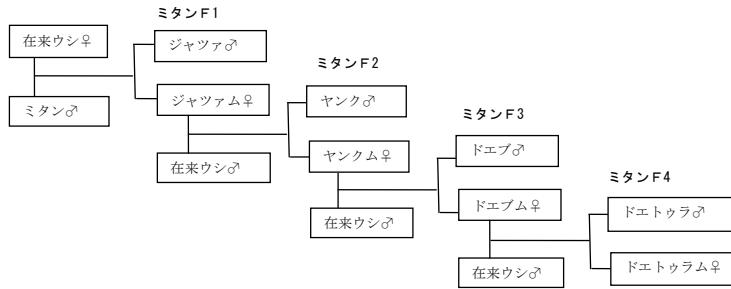


図3 ♂ミタンと♀在来ウシの交雑とバック・クロス

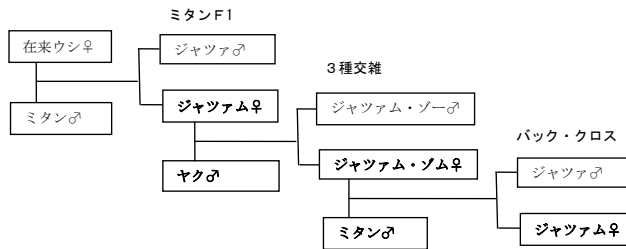


図4 ジャツアムのヤクとの交雑及びバック・クロス

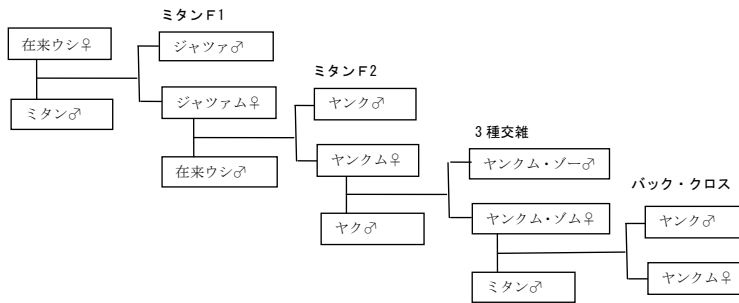


図5 ヤンクムのヤクとの交雑及びバック・クロス

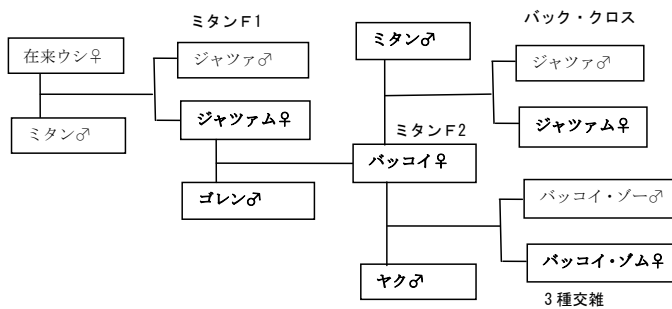


図6 バッコイのヤクとの交雑とバック・クロス

表1 在来ウシとヤクとミタンの交雑割合 (ジャツアムの場合)

交雑割合\交雑種	ジャツアム(F1)	ジャツアム・ゾム	「ジャツアム」(ミタンによるバック・クロス)	ジャツアム・ゾム(ヤクによるバック・クロス)
在来ウシ	50%	25%	12.5%	6.25%
ミタン	50%	25%	62.5%	31.25%
ヤク		50%	25%	62.50%

表2 在来ウシとヤクとミタンの交雑割合 (ヤンクムの場合)

交雑割合\交雑種	ヤンクム(F2)	ジャツアム・ゾム	「ジャツアム」(ミタンによるバック・クロス)
在来ウシ	75%	37.5%	18.75%
ミタン	25%	12.5%	56.25%
ヤク		50%	25%



写真16 ジャツアム (在来ウシ♀+ミタン♂)



写真17 ミタン (下流域のビドウンの農民が所有)



写真18 ジャツアム・ゾム



写真19 ヤンクム・ゾム



写真20 バッコイ（ジャツァム♀+ゴレン♂）



写真21 バッコイ・ゾム



写真22 チブリンでの放牧。多種の家畜が混在している。



写真23 ルクミン（ジャツァム♀+ミタン♂）



写真24 ミタン♂によるバック・クロス（ゾム♀+ミタン♂）



写真25 森で放牧されるミタン（アルナーチャル・プラデーシュ州ナフラ郡）

乱れているといった印象であった。種オスは、ヤク、ゴレン、ミタン、在来ウシと多様であり、(隣人の種オスが種付けするなど)各牧民が自ら所有する種オスによる交配をコントロールできない状況にある。したがって、交雑は極めて複雑多様となり、所有者自身が自分の家畜の交雑状況を必ずしも把握できていない。ジャツァム♀にミタン♂が交雑することもあり、その仔はルクミン(Lukming)と呼ばれる(写真23)。この家畜はミタンの遺伝子を四分の三もつことになる。また、本来のゾムにミタンが交雑することもあり、その仔は呼称がない(写真24)。このように、あらゆる可能な交雑種が登場している。

家畜の所有が、実際にどのような状況にあるのかを示すため、聞き取りによる11世帯の所有家畜個体数のデータを下に記す^{注19)}。

- ① LT氏(59歳:事例1) ヤク50頭(♂10頭、♀40頭)、ゴレン(種ウシ)1頭、ゾム(♀)18頭、ゾー(♂)14頭、在来ウシ10頭、ウマ6頭:ウシ科家畜計93頭
- ② PT氏(57歳:事例3) ヤク87頭(♂27頭、♀60頭)、ゾム10頭、ゾー5頭、ゴレン2頭、ウマ7頭:ウシ科家畜計104頭
- ③ TP氏(57歳:事例4) ヤク♂2頭、ゾム13頭、ジャツァム・ゾム8頭、ジャツァム12頭、ヤンクム15頭、その他:ウシ科家畜計約60頭
- ④ NN氏(57歳:事例8) ヤク22頭(♂5頭、♀17頭)、ゾム5頭、ゾー2頭、ウマ4頭:ウシ科家畜計29頭
- ⑤ T氏(55歳:事例10) ヤク80頭、ゾム・ゾー45頭、ヒツジ80頭、ウマ8頭:ウシ科家畜計125頭
- ⑥ LR氏(48歳:事例11) 約40頭のヤク
- ⑦ ND氏:(50代:事例12) 種ヤク2頭、ゴレン(種)1頭、「ゾム」20頭(ゾム3頭、ジャツァム・ゾム6頭、他は不明)、ジャツァム7頭、ヤンクム4頭:ウシ科家畜計34頭
- ⑧ TW氏(40代:事例13) ヤク35頭
- ⑨ X氏(40代:事例15) ゾー9頭、ジャツァム・ゾム20頭、ジャツァム1頭、その他:「ゾム」計約60頭:父がミタンを所有し、X氏も種オスとして利用。
- ⑩ TG(28歳:事例16) ゾム12頭(ゾム5頭、ジャ

ツァム・ゾム3頭、バッコイ・ゾム4頭)、ジャツァム8頭、バッコイ5頭:ウシ科家畜計25頭

- ⑪ Y氏(50代:事例17) 種ヤク1頭、ゾー8頭、ゾム9頭、コイ(ゾムの仔)1頭、ジャツァム1頭、在来ウシ5頭、ジャージー^{注20)}(外来ウシ、種用)1頭:ウシ科家畜計26頭畜

牧民は家畜の数を正確に話しながらないため、所有個体数は必ずしも正確とは言えないが、家畜構成の状況がある程度反映している。11世帯のうち、⑥と⑧はヤクのみを所有している。ヤクとゾムを中心とする世帯は、①、②、④、⑤の4世帯である。他の③、⑦、⑨、⑩、⑪は「ゾム」を中心とする世帯である。「ゾム」には多様な交雑を含んでおり、また、群れにはジャツァム、ヤンクム、バッコイなどの交雑種のほか、在来ウシを含んでいる。これらは、主にヤクと交雑して、「ゾム」を再生産するとともに、搾乳を行うための家畜である。

表3は農業省畜産局のメラック事務所のデータに基づいて、メラックにおける家畜の個体数のデータをまとめたものである。全国共通のフォームに基づいており、ミタンとその交雑種がF1からF4まで分けて記載されている。多様な「ゾム」の種別の個体数は牧民自身も把握しておらず、全く不明である。聞きとりによれば、「ゾム」の中で本来のゾムは現在ではわずかに1割ほどだろうと推定される。

変化の要因と社会的背景 ジャツァムなどの導入の経緯

ジャツァムが初めてメラックに導入されたのは60年以上遡る。ただし、メラック牧民が新たな家畜を導入する傾向が顕著になったのはもっと後のことで、この20~30年ほどの間に急激に増加したようである^{注21)}。ジャツァムが導入された経緯について、TD氏(82歳、事例6)は次のように記憶している。「17歳のころ(65年前)、父が最初にジャツァムを村に導入し、他の人びとがその真似をするようになった。ラディ村のトンリン(Tongling)集落から2頭のジャツァムを連れてきて、ヤクと交雑させた」。

ジャツァムなどの導入により新しい多様な「ゾ

表3 メラックの家畜種別個体数
(農業省畜産局事務所統計2010より筆者が作成。家畜名は統計のまま)

家畜の種類	頭数	備考
Mithun ♂	8	在来ウシと交雑してジャツァムを生産するための種オス。インドのアルナーチャルから導入。現在はブータン政府農業省も若干数を牧民に供給。
Jatsa ♂ Jatsam ♀	769	ミタン♂のF1:ミタン♂と在来ウシ♀との交雑種。
Yanku ♂ Yankum ♀	1,752	ミタン♂のF2:上記F1(Jatsam)♀と在来ウシ♂との交雑種。
Doeb ♂ Doebum ♀	819	ミタン♂のF3:上記F2(Yankum)♀と在来ウシ♂との交雑種。
Doethra ♂ Doethrum ♀	397	ミタン♂のF4:上記F3(Doebum)♀と在来ウシ♂との交雑種。
Yak ♂ ♀	2,214	
Zom ♂ ♀	3,023	本来はヤクのF1:♀ヤクとゴレン(Goleng)の交雑種。ただし、現在のメラックでは、実際は、♂ミタンの交雑種と♀ヤクとの交雑など、また、それとミタン♂の交雑などなど、複雑な交雑を含む。本稿では本来のゾム以外を「ゾム」として区別した。
Goleng ♂	50	チベットから導入された小型の高地種ウシ。ヤク♀と交雑してゾムを生産するための種オス。
Nublang ♂ Thrabam ♀	21	ブータンの在来ウシ(local cattle)。
ウシ科計	9,053	
Horse ♂ ♀	942	
Mule ♂ ♀	92	
Sheep ♂ ♀	1,189	
Goat ♂ ♀	18	

ム」が増えた経緯や要因は何だろうか。TD氏によれば、「ブータン政府が森の火入れを禁止したため、森の木が切り開かれた高地の放牧地（草地）が減少し、劣化したため、放牧地が不足し、ヤクの数が増えた。それに、チベットからのゴレンの供給が減ったため、本来のゾムを生産することが難しくなった。そこで、その代用として、ジャツァムにヤクを交配させることが試みられた」。

ヤクと比べるとゾムは乳量が多い。しかし、ゴレンの供給が難しくなったことで、ゾムが少なくなった。そこで、下流の農村で手に入れやすい、ジャツァムやヤンクムが導入されたわけである^{注22)}。

ジャツァムやヤンクムにヤクを交配させると、本来のゾムと同様に乳量の多い交雑種ができた。ヤクと比べて単に乳量が多いだけでなく、冬に搾乳できないヤクとちがって、冬にも乳を搾ることができる^{注23)}。

LR氏（事例11）によれば、アルナーチャル（タワン方面）では「ゾム」を生産せず、メラックの方から買う。前は少なかったが、今はその需要が増えているという。そうした需要もまた、「ゾム」

の増加の要因の一つであろう。

ミタンの導入をめぐる：ミタンとヤクのせめぎあい

ブータンでは、農民や農牧民が、従来よりアルナーチャルからミタンを種オスとして導入してきた^{注24)}。そして、メラックの一部の牧民がその伝統を取り入れた。ミタンの導入によって、交雑はより複雑化していく。すでに述べたように、ジャツァム・ゾムにミタン♂を交配させたバック・クロスによって産まれる仔は、ジャツァムに近い形質と性能をもつため、「ジャツァム」（♂は「ジャツァ」）と呼ばれる（図4）。同様にヤンクム・ゾムのミタンによるバック・クロスも同様で、産まれる仔は「ヤンクム」（♂は「ヤンク」）と呼ばれる（図5）。バックイ・ゾムの場合も同様である（図6）。こうした交雑は、現象としては、まるでヤクとミタンの遺伝子が相殺されF2の欠点を補うかのようである。

本来のゾムは、乳量が多いが、その仔であるF2の性能は悪いため、生後間もなく殺されるの

が普通であった。したがって、本来のゾムは、常にヤク♀とゴレン♂によって補充されなければならなかった。ところが、ミタン♂の導入によって、「ゾム」の再生産が可能となったのである。例えば、ジャツァム・ゾム（ジャツァム♀+ヤク♂）にミタン♂を交雑させて「ジャツァム」（ミタンの遺伝子が62.5%、ヤクの遺伝子が25%、在来ウシの遺伝子が12.5%、表1）が再生産され、それは搾乳に有用である。また、その「ジャツァム」にヤク♂を交配させれば、再び「ジャツァム・ゾム」が生産できるという具合である（遺伝子割合は表1）。このように、理屈上は、「ゾム」にミタン♂とヤク♂を交互に交配させることによって、永続的な「ゾム」の再生産が可能となるのである。実際に、そのような交雑を意識的に行っている牧民もいる。ND氏（事例12）は、10年前から「ゾム」を飼うようになって、ミタンを4年前に購入したが、2011年にそれを売って、今は種ヤク2頭とゴレン1頭を持っているという^{注25}。ミタンによるバック・クロスからヤクによる「ゾム」生産に切り替えたことになる。

このように、ミタンF1・F2やミタン自体の導入によって、メラックの牧民の家畜飼養のバリエーションが増え、放牧地域も低地に向かって拡大した。低地における「ゾム」の新たな放牧地は、放牧権を買い取ったり、放牧料を支払ったりすることで、確保している。

ただし、「ゾム」が増えてきたことで、放牧地の不足も起きつつある。「ゾム」のデメリットとして、ヤクに比べて草の消費量が約3倍も多いことを指摘する牧民もいる。また、「ゾム」の大きな群は、家畜管理が、とくに低地の森で飼う冬には大変だという。一方、ヤクの方は、冬季の半年間は搾乳ができない代わりに、ほとんど手がかからない。乳の質もヤクの方がいいといわれる。そうした理由で、逆に、「ゾム」を売り、ヤクを買い戻すことにより、ヤク飼養に戻ることを指向する牧民も出ている（例えば前述のND氏）。

おわりに

最後に、メラックの人びとの生活の変化をめぐる歴史的・社会的背景を検討したい。まず国際関係を中心とする外部との関係の変化、次いで内的な社会背景を取り上げるが、それらは相互に関連

している。

TD氏（80歳くらい、事例14）によれば、「父の時代には、チベットに交易や巡礼に行く人が多くいた。父は交易のために、ブータン暦の5月、7月、11月に行って、ブータンからコメ（赤米）を持っていき、チベットで塩と交換した。（暖かい時期の）5月、7月にはゾーで運び、（寒い時期の）11月にはヤクで運んだ。コメは下流の村のネブから手に入れた。メラックから下流の村にはゾーかうマで行った。」という。

ブータンとチベットとの関係は、1960年前後の中国インド間の関係悪化と国境紛争を契機に大きく変化した。それ以前のブータンはチベットと宗教的・経済的な関係をたもっていたが、それ以後、交流が著しく制限されるようになった。

1959年のチベット動乱により、ダライ・ラマが、アルナーチャル・プラデーシュ（当時、北東辺境庁）のカメン地区（現在のタウン郡と西カメン郡の地域）を通して、インドに逃れた。さらに、1962年10月、大規模な中印国境紛争が勃発した。中国軍がマクマホンラインを越えて南下し、インド軍が敗走した。その主戦場となったのがカメン地区（タウン）であった（Biswal 2006: 25）。その後中国軍が撤退し、現在のアルナーチャル・プラデーシュ州をインドが実効支配するようになった。

TD氏は、30歳のころ、中国軍に追われた多くのインド兵がこの地域に敗走してきたことをよく覚えている。彼の記憶によれば「インド兵はアルナーチャルの方から逃げて来て、おなかを減らして、木の実を食べたり、ここで食べ物をもらって食べた。ズボンが焼けていた。銃も運ばなくて、置いて逃げた」。

1959-61年、インドとブータンは、対中国の安全保障のため、インド・ブータン間の道路建設を含む経済援助協定、インド軍によるブータン軍の訓練の委託など、同盟関係を強める（ローズ 2001: 90-110）。

タウン地域がチベットと南の地域を繋ぐ廻廊となっていた（Lama 1999:3）。タウンのモンパと同様に、メラック牧民は低地の農耕地域のコメとチベットの塩を交換する交易に携わっていた。また、タウン地域の牧民を介して、チベットからゴレンが供給されていた。しかしながら、中国インド間

の紛争後は交易の途絶により、ゴレンの供給がなくなった。それが、メラックにおいて、低地の家畜であるジャツァムなどが導入される要因になったわけである^{注26)}。

国境を挟んだアルナーチャルとの間の交易関係は継続されたが、その交易の中味は、タウンに南からの道路を通じたあと大きく変わったという。国境紛争のあと、インド軍は実効支配を確立するため、道路建設と軍の駐留を急いだ。道路が開通すると、南からインド製商品が大量にタウン地域に入るようになった。また、軍の駐留により、肉と畜産物の需要が大幅に増えた。その結果、メラックの人びともあらゆる商品をタウンで手に入れ、一方、多くのバターや熟成チーズや家畜をタウンで売ようになったという。メラックの人びとの生活は、タウン地域を経由した（あるいはタウン牧民の仲介による）「チベットとの伝統的的交易」から、タウン地域を介した「インド市場経済への参入」へと大きな転換が起こったのである。

中印国境紛争とそれを契機としたインド政府による道路建設と軍の駐留は、アルナーチャルの社会を大きく変える契機になったが、それは国境を越えてブータン東部、とりわけ、元々アルナーチャルとの関係が強かったメラック・サクテンのプロバ（牧民）にも大きな影響を与えたわけである。

その後、ブータン全体でもインドによる道路建設などの開発が進み、近代化と市場経済が徐々に浸透してきた。メラック牧民にとっては、下流の稲作農村地域への市場経済化の浸透が再び影響をもたらすことになる。下流の稲作農村地域との関係は、伝統的な関係（ネブとの物々交換など）を維持しつつ、安いインド産白米や多様な商品の入手など、市場経済に対応してきた。

下流の稲作農村地域からジャツァムなどを導入する契機となったのは、森の焼き入れ禁止政策によるヤク放牧地の縮小・劣化、中印国境紛争後のゴレンの供給不足によるゾムの供給不足などであったが、近年になって多様な「ゾム」が普及した背景には市場経済化の影響があるに違いない。聞き取りの回答を総合すると、以下のようなシナリオが想定できる。タウン市場経済化、次いで下流の稲作農村を通じて、市場経済に巻き込まれたメラック牧民は、より多くの現金収入が必要になった。一方で学校教育の普及により、子供の養

育の費用も増えた。人口増加のため、生産の総量の増加も必要となった。そこで、メラック牧民は、ゾムの増産がままならぬ状況の中で、下流の農村からジャツァムなどを導入し、それにヤク♂を交配させて「ゾム」を増産することにした。さらに、アルナーチャルから下流に農村地域に持ち込まれていたミタンをも導入することで、「三元交雑」を含む多様な「ゾム」の再生産が可能となった。こうして、効率よく「ゾム」を増産し、より多くの乳を一年中得られるようになったのである。

多様な「ゾム」への家畜の転換と群の個体数の増加のためには、低地部への放牧地の拡大も不可欠であった。そこには、もう一つの社会的背景が想定される。すなわち、中低地におけるジャツァム飼養の減少である。中低地の農村地域では、農業省が促進したブラウン・スイス種、ジャージー種など乳量の多い外来種への転換が進められてきた。こうした外来種のためには、栽培牧草が必要である一方、従来行われてきた移牧は必要ない。

一方で、ブータン社会の近代化と学校教育の普及により、厳しい生活を強いられる移牧を継ぐ若い世代が少なくなっている。そうした要因によって、近年、ジャツァムの移牧が減少している。当然、中低地で使われない放牧地が増加する。メラック牧民は、そうした放牧地の放牧権を買い取ったり、借りることで、放牧地を拡大することができたと考えられる。

ブータン極東の辺境地域のメラック牧民は、孤立したコミュニティで生きてきたわけではない。むしろ古くから、チベット（高地）＝稲作農耕地域（低地）を結ぶ交易、インド東北部のアルナーチャル・プラデーシュ州との交流・交易など外部世界との関係を結んできた。そのため、「伝統的」な生活と文化を維持してきたかに見えるメラック牧民は、対外関係の大きな変動と市場経済化などに対応すべく、生業活動としての交易と牧畜システムに試行錯誤を繰り返してきた。そして今も、より安定的な適応形態を求めて摸索を続けているといえよう。家畜の交雑の多様化・複雑化という生態学的現象の向こうに、歴史的・社会的状況の大きな変化が読みとれるのである。

注

1) 季節移動、家畜所有、家族構成などの世帯別

のデータについては、17名のインフォーマントから聞き取りを行った。個々のデータは記さないが、事例1～17として提示する。

- 2) アルナーチャルのタウンと西カメン郡にモンパが居住し、モンパの農民はウンパ、牧民はプロバと呼ばれ、またそう自称している(安藤他2011:61-89)。モンパは、北のモンパ(タウン Tawang)、中央モンパ(ディラン Dirang)、南のモンパ(カラクタン Kalaktang)と区分される(Lama 1999: 1,5)。モンパはチベット語方言で「低地の人」を意味する(Lama 1999: 1,5; Biswal 2006: 13)。Biswalによれば、彼らは、隣接するブータンのシャチョップと似ている(Biswal 2006: 13)。シャチョップは「西の人」の意味で、彼ら自身はツァンラ(楽園の人)と自称する。
- 3) ブータン中央部のトンサ(Trongsa)、シエムガン(Zhemgang)、ダガナ(Dagana)にも、ブータンの先住民とされ「モンパ」と称される民族集団がいる(Dorji 2008: 8)が、これはアルナーチャルのモンパとは関係がない。
- 4) RNR (Renewable Natural Resources) Office が正式名称である。
- 5) 事務所には他に農業担当者が駐在することが普通だが、メラックには農業部門が無い。
- 6) 425 kgの変圧器14機が、木組みに載せて、32人で3日間かけて運搬された。他にも大量の材料が人手や家畜によって運ばれた。
- 7) メラックの寺院の三階の祭壇にも、アマ・ジョモの像が安置されている。なお、寺院の一階は、中心に千手千眼観音が安置され、二階はテンギユルを取めた経堂になっている。
- 8) ネパールのソル地域のシェルパの牧民の場合も同様だが、異なる方法を取る。ゾムの仔(F2)に生後乳を飲ませないで、数日後に飲ませると、仔(F2)は下痢で死ぬという(稲村・古川2000: 171-181)。
- 9) ゴーはネパールのシェルパ(農牧民)の間では、荷物運搬に利用し(稲村・古川2000: 171-181)、チベットの一部では耕起用の家畜として利用する(稲村他2001: 1-21)。なお、メラックでは、物資の運搬にはウマ、ラバ、ヤク、ゾーが利用される。
- 10) 冬季には、南西のKhalingやその周辺、Thimshing、Kampara、また、東の国境に近いKhelephu、Shinkar、Lauri、また、国境を越えたアルナーチャル領内のKhalaktangやTawang方面の低地などに移動する。遠い所では、冬の放牧地まで5、6日までかかる。
- 11) ヤクは、通常4-5月に出産し、6～8月には乳がよく出るが、9-10月には乳が少なくなる。そして、11月以降には乳が出なくなる。ヤク搾乳を観察した9月は、乳量が少ない時期に当たる。
- 12) ただし、多様な交雑により、現在は「ゾム」の仔を殺さず、育てることが多くなっている。これについては後述する。
- 13) ネブは一種の「擬制親族」で、制度化された友人関係と言えるものである。この関係は親から子へと世代を超えても継承される。
- 14) デイレイ(direy)は伝統的な牦の単位。15デイレイは1.3kgほどになる。
- 15) 下の夫が移牧をし、上の夫が家と交易の仕事をしてきた。子どもが学校に通っているため移牧が難しくなり、家畜を売った。現在はウマ3頭のみを所有し、上の夫は電気の敷設などの賃労働、下の夫はランジュン(Rangjung: 下流域の農村)で林業の仕事に従事している。
- 16) 2005年からブータン政府が家畜の販売を禁じたとの回答もあったが、現在も家畜の販売は続いていると思われる。
- 17) エゴの長男は村内の妻の家に住んでいる。四男は結婚して独立し、村内に住んでいる。長女は村外に婚出している。次女は2人の夫と結婚し村内に住んでいる。三女も結婚し村内に住んでいる。
- 18) T氏(55歳、事例10)によれば「息子の内の誰と一緒に住むかは嫁に依ることが多い。気立てのよい嫁と住みたいと思う。今は娘が家を継ぐことも多い。自分も娘と住む方がいいと思っている」。
- 19) ウシ科家畜を中心として聞き取りしたため、ウマやヒツジの数を聞き落としている可能性がある。
- 20) 「外来ウシとその交雑種は、乳房が大きすぎて、森の中では生存が難しい」との評判があり、その飼育はメラックでは例外的である。
- 21) ND氏(50代、事例12)によれば、「25年か

- ら30年前に村で変化が起こり始めた。多くの人が下の村で、安い在来ウシやヤンクムやジャツァムを買って、飼うようになった」。
- 22) 聞き取りによれば、現在のゾムの価格は約30,000 Nuで、ジャツァム・ゾムは約20,000 Nu、ジャツァムは16,000-17,000 Nuほどであり、ヤンクムはそれより安い。
- 23) LR氏（48歳、事例11）は、「1990年代半ばまでは、本来のゾム（♀ヤクとゴレンのF1）が多かったが、それ以後は、お金のない人が低地の在来ウシやジャツァムやヤンクムを買うようになった。それに♂ヤクを交雑させた。その交雑種（多種の「ゾム」）はミルクの量が多いことがわかった。」という。
- 24) アルナーチャルからブータンに持ち込まれるミタンは種オスだけである。この地域では、2010年3月に、フォンメで農民が飼うミタンを見ることができた。前年に、アルナーチャルのナフラの方から来た2人の仲買人から40,000 Nuで購入したのだという。ミタンは、アルナーチャルの低地の森で放し飼いにされている。飼いは極めて粗放的なもので、牧者は週に一度程度、塩を与えるだけである。稲村と川本は、2010年2月に、アルナーチャルにおける調査で、ナフラ郡のケロン（Khelong）村とナク（Nakhu）村（標高1650メートル）において、ミタンの放牧を見ることができた。ナク村では、牧者と森に入り、「ホーホー、ヤーヤー」と呼ぶと、10頭余のミタンが集まってきた（写真25）。塩を手で与えると、おとなしく舐めてきた。ミタンは、搾乳は行われず、肉用として飼われている。ミタンの供犠と肉は結婚式や祭りに欠かせない。ナフラ郡の住民はミジ族農民で、主に焼畑によりトウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、タロイモ、マメなどが栽培されている。
- 25) ND氏（事例12）によれば、4年前ケレフ（アルナーチャルに近いが、チブリンと同じような場所で10家族ほどが住んでいるという）滞在中に、ケレフの住民から3万Nuでミタンを購入した。そのケレフの住民は、アルナーチャルのカラクタン出身の仲買人がナフラの方で手に入れたミタンをボムディラで買った。自分のすべての家畜のメスとミタンを交配させ、メスだけで計70頭ほどの家畜を生産した。「ジャツァム」などミタンのハイブリッドを生産してきたが、だんだん質が悪くなるので、種オスをヤクに変えた。今年（2011年）、フォンメ（下の稲作農村）の男に26000 Nuで売った。ミタンの年齢は16歳くらいだが、25歳くらいまで生きる。ミタンは、繁殖期にはヤクの種オス、ゾーなどとけんかをするので、怪我が多いという。
- 26) 「ブータンはときには対中国政策で、インドより若干先行することがあった。たとえば、1960年、政府はチベットとの交易を全面禁止したが、これはニューデリーがヒマラヤ越えの交易を禁止する数か月前であった。この禁止は、余剰米を永らくチベット市場で売りさばいていたブータン経済にとっては大打撃であった。……したがって、1963年にインドへの道路が開通するまでは、その交易政策はブータンに高い代償を強いるものだった」（ローズ2001: 94）。

参考文献

- 安藤和雄他「東ヒマラヤのあこがれ地、アルナーチャル・プラデーシュ―その魅力と現代文明への問いかけ」奥宮清人編『生老病死のエコロジー―チベット・ヒマラヤに生きる』昭和堂、61-89頁、2011年
- Bisawal, Ashok: *Mistic Monpas of Tawang Himalaya*. INDUS Publishing Company, New Delhi, 2006.
- Dorji, C.T.: *A Consc Cultural History of Bhutan*. Prominent Publishers, Dheli, 2008.
- 稲村哲也・古川彰「4章1 多様な家畜と交配のシステム」山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌』八坂書房、171-181頁、2000年
- 稲村哲也他「チベットにおける農業と牧畜の現状」『愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編）』49:1-21, 2001年
- Lama, Tashi: *The Monpas of Tawang: a profile*. Himalayan Publishers, Itanagar, Arunachal Pradesh, 1999.
- ローズ, E. レオ『ブータンの政治 近代化のなかのチベット仏教王国』（乾有恒訳、山本真弓監訳）明石書店、2001年

Summary

Changes in the Pastoralism of Merak, in the Far-eastern Highlands of Bhutan, and their Historical and Social Background

Tetsuya Inamura¹⁾, Tashi Dorji²⁾ and Yoshi Kawamoto³⁾

- 1) Aichi Prefectural University, Faculty of Foreign Language
- 2) Department of Livestock, Ministry of Agriculture and Forests, Bhutan
- 3) Primate Research Institute, Kyoto University, Japan

Herders in Merak, in the far-eastern highlands of Bhutan, traditionally used to raise only yaks and their hybrids, but about 60 years ago they introduced jatsams (hybrids between local cattle and mithun bulls) and mithun bulls from downstream villages. In recent years they are raising increasing numbers of jatsams, jatsam zoms (hybrids between jatsams and yak bulls), yangkum zoms and other types of hybrids (including multiple crosses of yaks, local cattle, and mithuns). One factor that has led to these changes is a lack of Goleng bulls (a Tibetan breed of cattle) due to the border conflict that erupted between China and India in 1962 and the resulting cessation of trade with Tibet. Another is the decrease and deterioration of high pastureland for yak grazing and the pressure of population increase, which has led to a demand for animals that can be pastured in lowland pastures. Yet another factor is economic. Jatsams and local cattle are easy to obtain, jatsam zoms produce large quantities of milk, and through backcrossing with mithun the reproduction of jatsam zoms has become possible. These changes coincide with the needs of herders who require more cash than in the past because of the introduction of a market economy. The diversification of raised animals, especially new type of hybrids, is a unique strategy of adaptation by the herders of Merak to their historical and social circumstances.